保健室からみる児童のようす

★　定期健康診断の結果

★　保健室来状況

令和6年度学校保健委員会
養護教諭　牛澤かえで
澤田由紀子

定期健康診断の結果

身長

男子

身長	１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生
嶺町小平均	115.9	122.8	128.3	134.1	139.6	146.8
大田区平均	117.1	123.3	128.8	134.6	140.4	146.8
差	**-1.2**	**－0.5**	**－0.5**	**－0.5**	**－0.8**	**0**

女子

身長	１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生
嶺町小平均	113.8	121.9	128.2	134.6	141.1	147.2
大田区平均	116.0	122.1	128.3	134.3	141.3	148.2
差	**-2.2**	**-0.2**	**-0.1**	**0.3**	**-0.2**	**-1.0**

〇本校では、４月、９月、１月の年３回発育測定を行っており、児童が自身の成長の変化を実感できる機会となっている。

〇大田区の平均身長と比べ、全体的にやや低めになっている。

体重

男子

体重	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
嶺町小平均	21.5	24	26.9	29.8	36.4	39.9
大田区平均	21.5	24.5	27.6	31.4	35.7	40.2
差	**0.0**	**-0.5**	**-0.7**	**-1.6**	**0.7**	**-0.3**

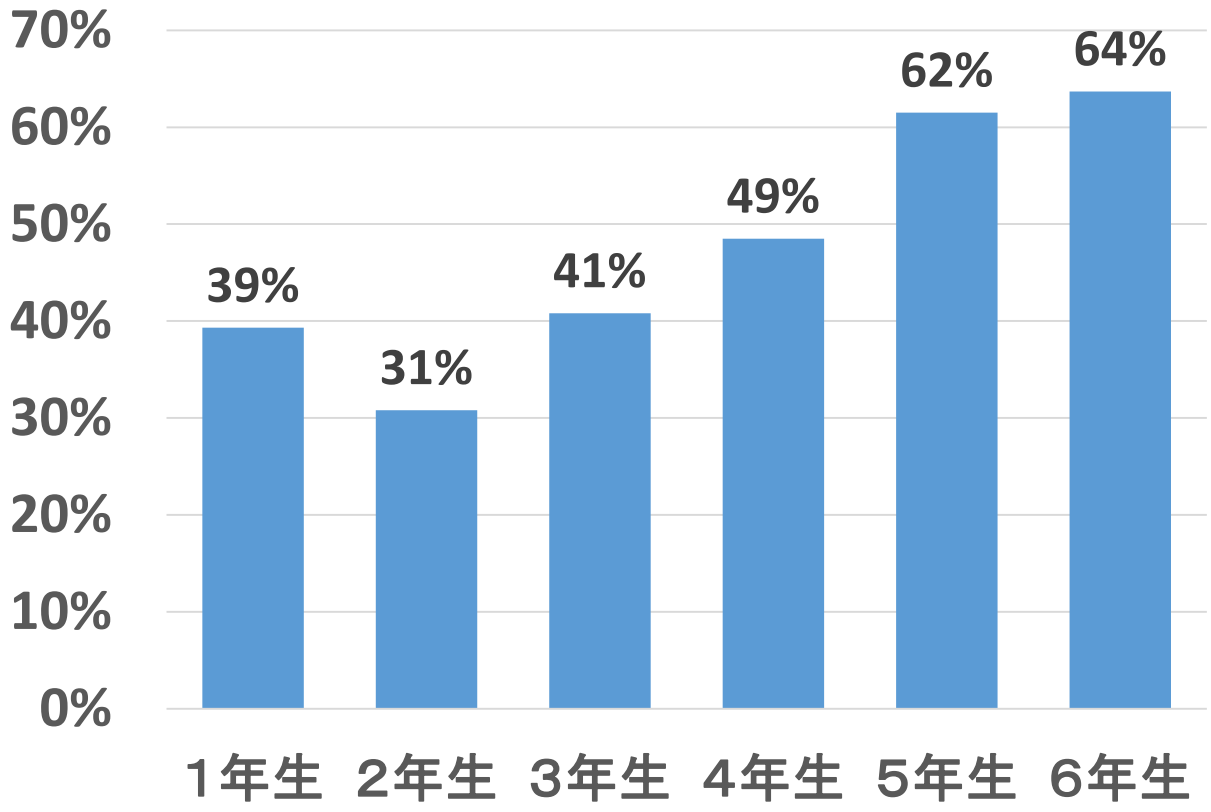
女子

体重	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
嶺町小平均	20.1	23.0	26.7	30.4	34.6	39.4
大田区平均	21.0	23.7	27.2	30.5	35.0	40.1
差	**-0.9**	**-0.7**	**-0.5**	**-0.1**	**-0.4**	**-0.7**

○女子は、どの学年においても大田区の平均を下回る結果となった。

○男子は、４年生が－1.6㎏と痩せ気味の児童が多い。

視力



１．０未満の児童の割合

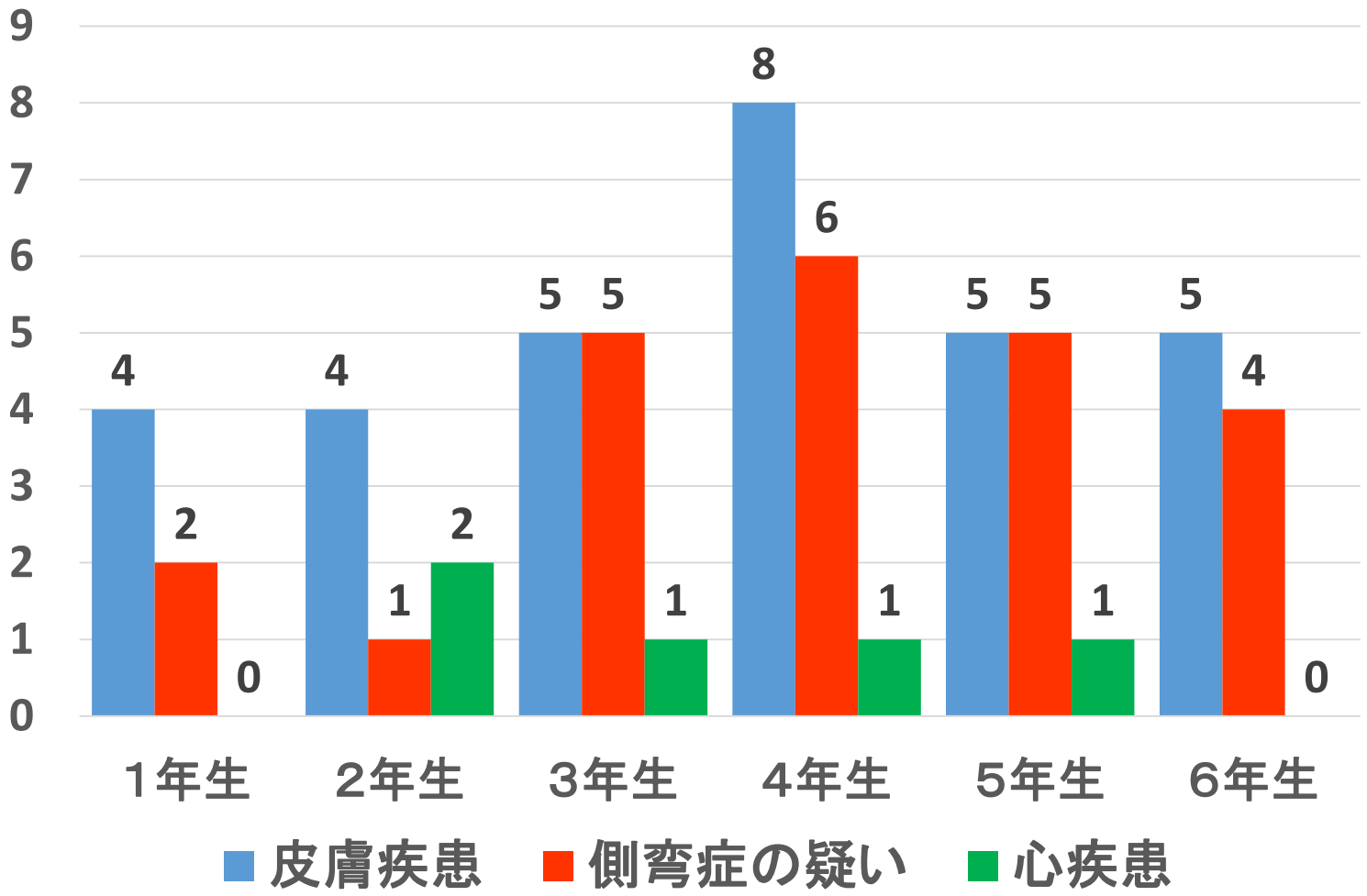
○視力1.0未満の児童に受診勧奨。

○受診勧奨者数は３９７名。

○1.0未満が１年生は２年生を上回っており、３年生から学年が上がるにつれて増える傾向にある。

○５，６年生は５割を超えている。

内科

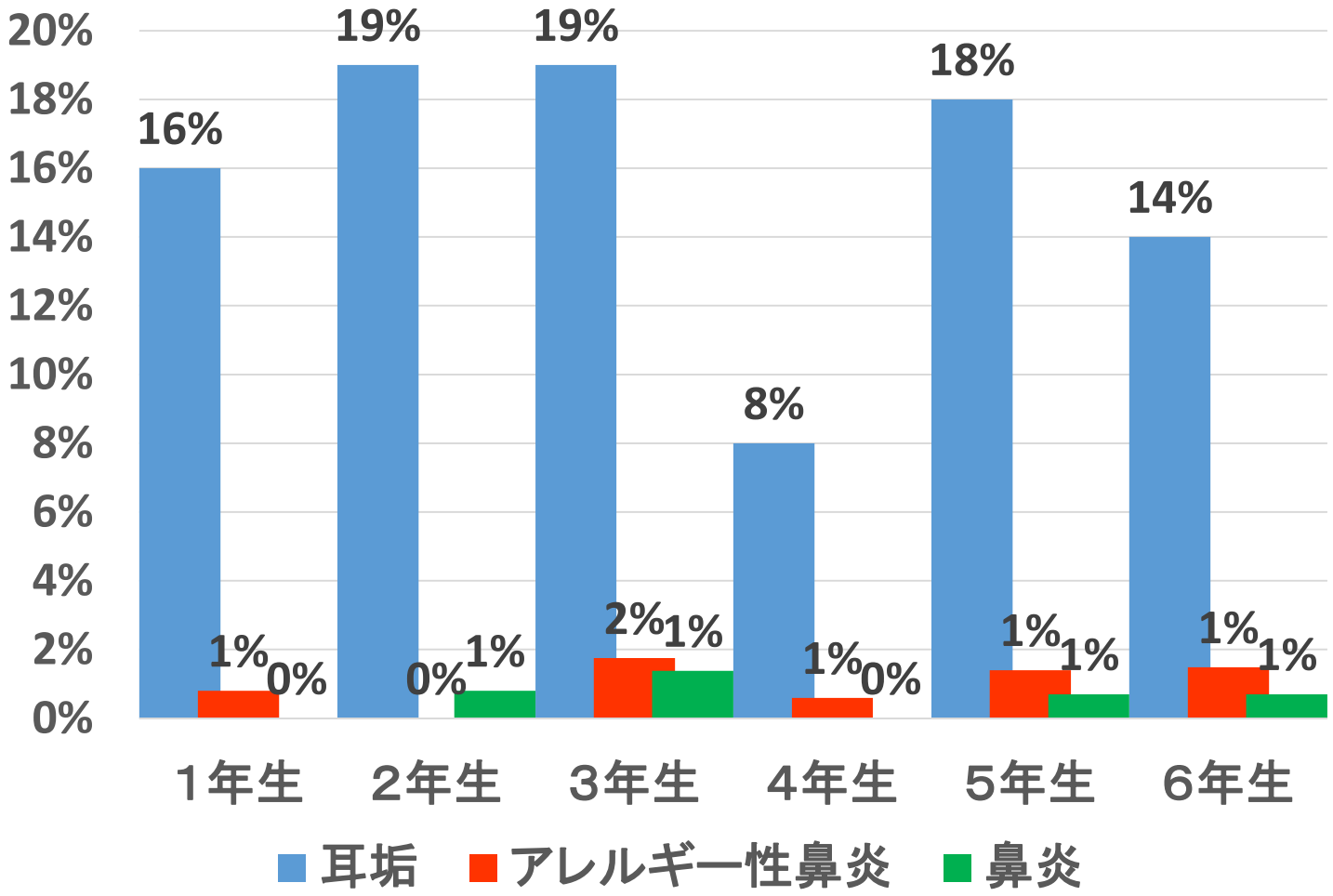


〇受診勧奨者数は59名。

〇皮膚疾患はほとんどがアトピー性皮膚炎によるもの。

〇側弯症の疑いの児童は３年生以上に見られる。

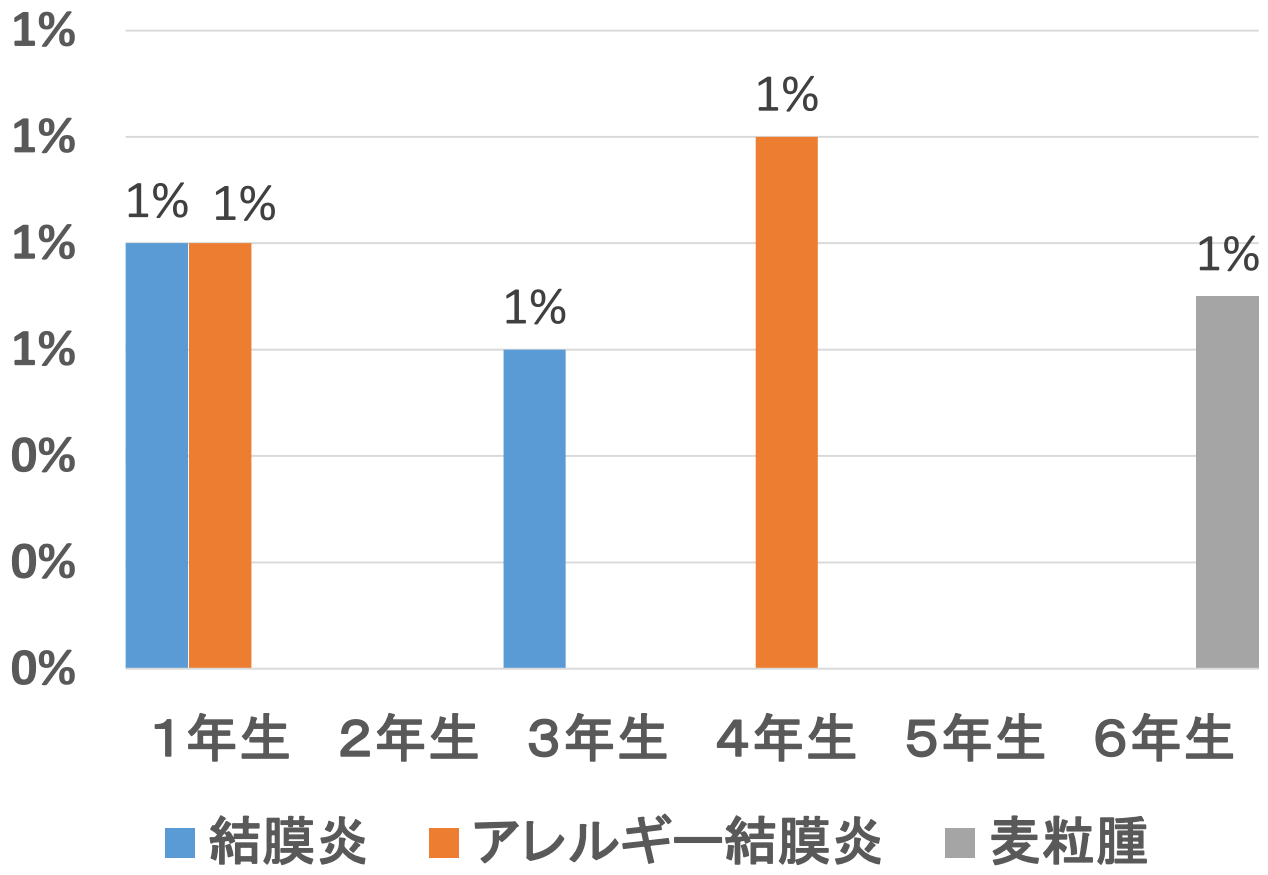
耳鼻科



○受診勧奨者数は141名。

○耳垢が全体の15%と多く見られた。

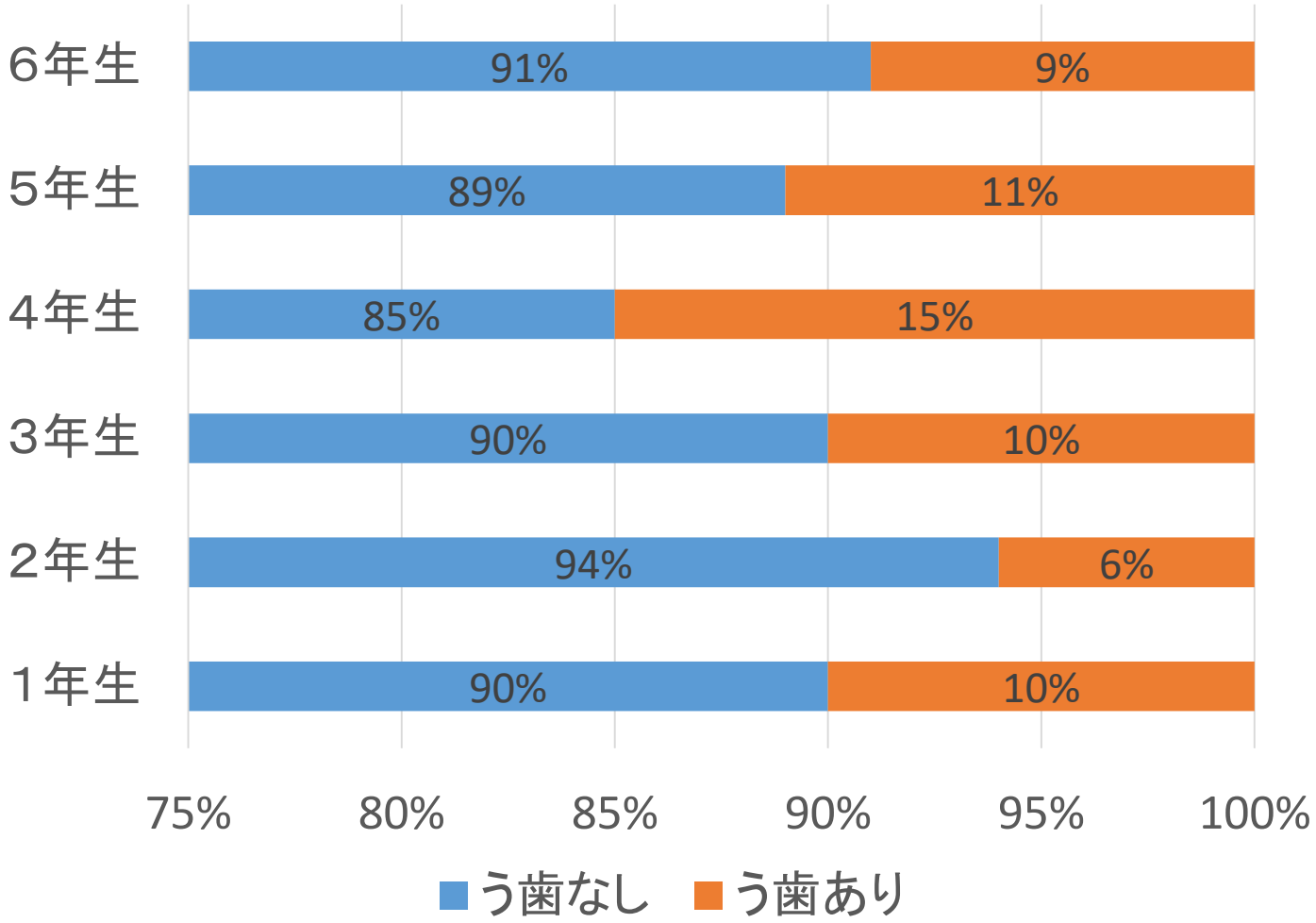
眼科



〇受診勧奨者数は5名。

〇眼科の疾患は少数だった。

歯科



〇受診勧奨者数は184名。

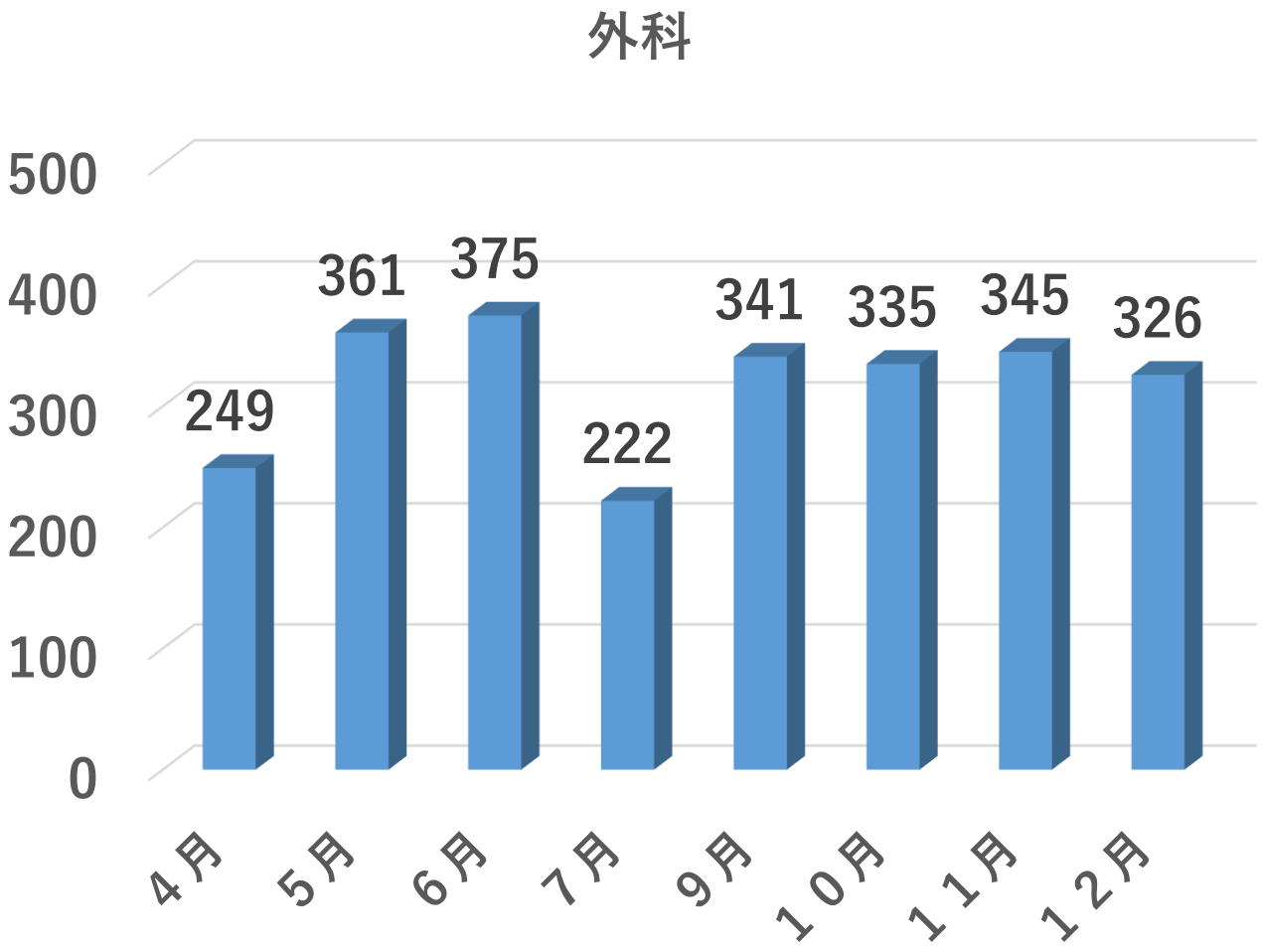
〇むし歯のある児童は、４年生が１５％と多いが全体的にみるとむし歯なしの児童が多い。

〇歯垢のある児童が４年生、６年生に多かった。

〇４～６年生は秋にも歯科検診を実施。

保健室来室状況

外科



〇外科的な理由での4-12月までの来室者数は、2,554名

- 新しいクラスに慣れてくる６月に来室が多かった。
- 擦り傷、切り傷、打撲などの理由が多い。
- 曜日別では木曜日が多かった。

〇学年別人数

1年：689名　2年：432名
3年：362名　4年：553名
5年：321名　6年：197名

内科

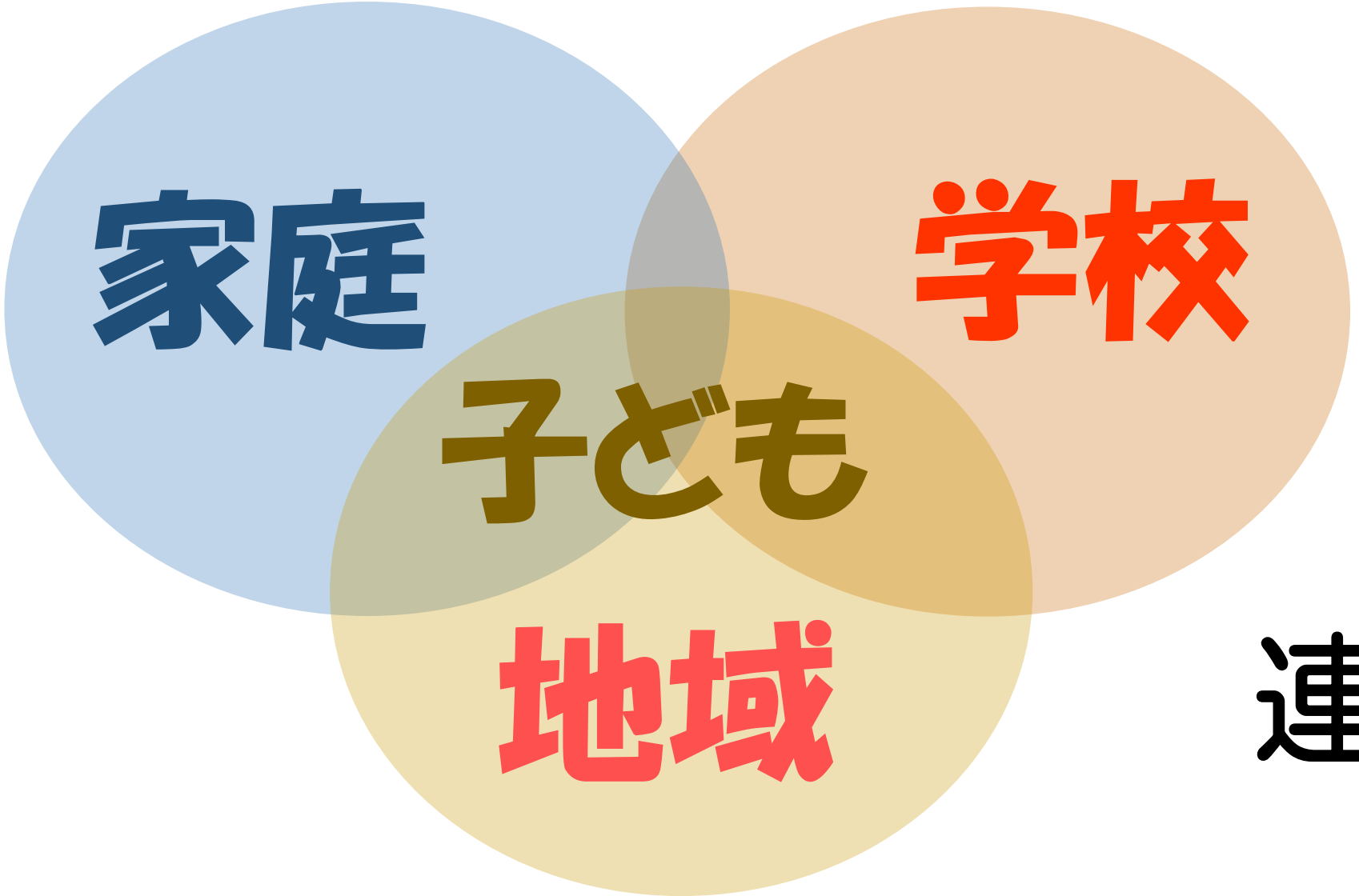
〇内科的な理由での4-12月までの来室者数は、1,203名

- 夏休み明けの９月と運動会練習期間の１０月に体調を崩す児童が多かった。
- 発熱、腹痛、頭痛などの理由が多い。
- 曜日別では金曜日が多かった。

〇学年別人数

1年：248名　2年：197名
3年：137名　4年：253名
5年：232名　6年：136名

児童の心身健康の保持増進のために…



連携

嶺町小児童の体力の実態と体力向上の取組について

～体力調査の結果から～

令和６年度　学校保健委員会

体育主任　佐々木大貴

目次

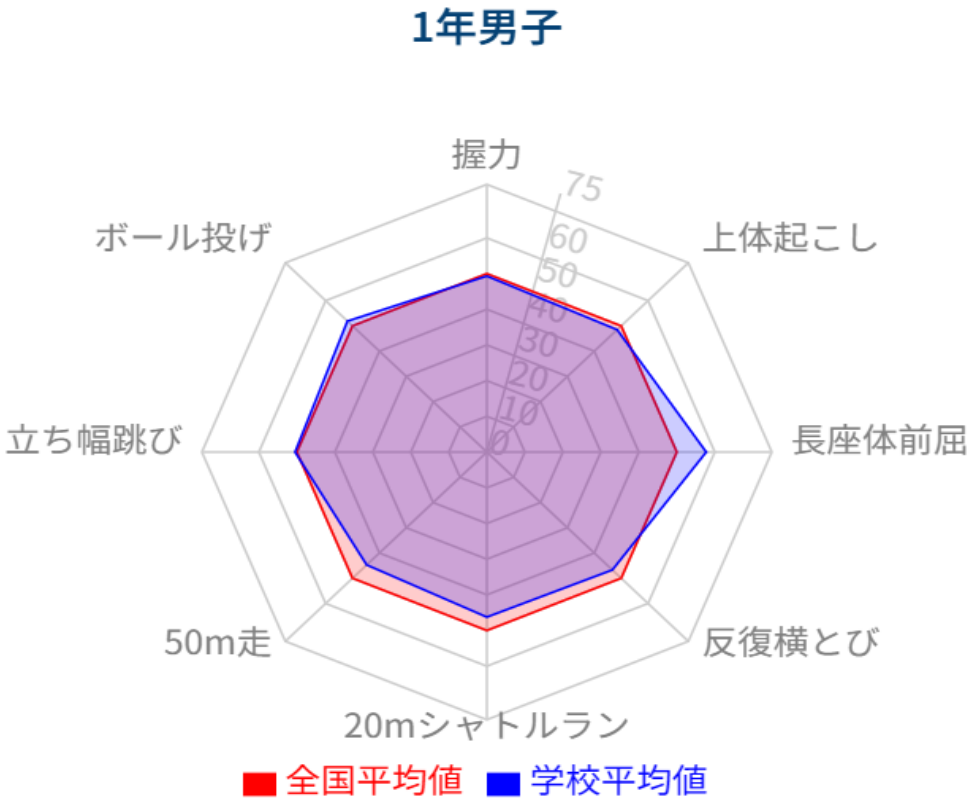
１　令和6年度　体力調査　本校の結果（学年別）

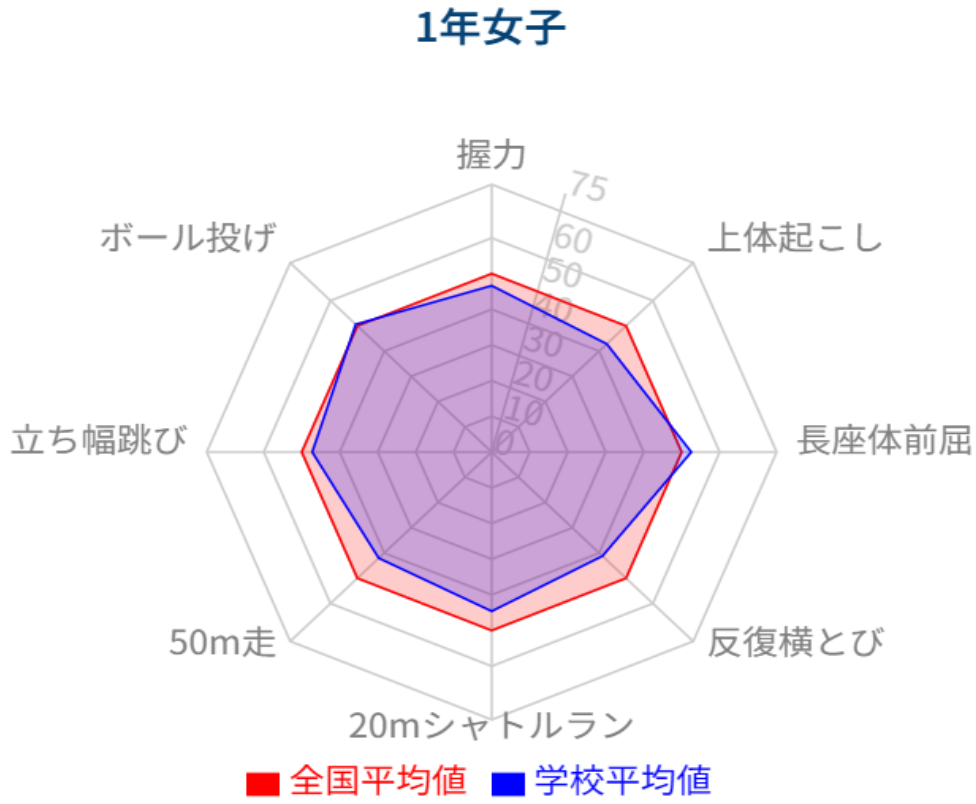
２　学校での取り組みについて

３　なぜ体力が必要なのか

Ⅰ　令和6年度　体力調査　本校の結果（学年別）

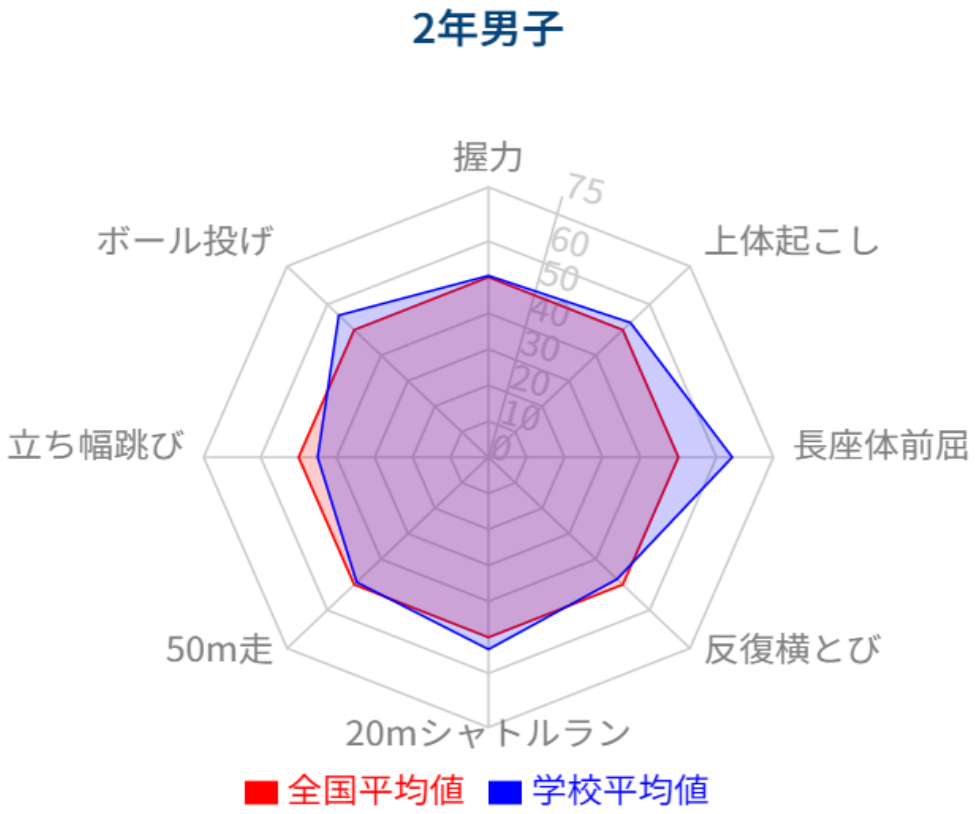
新体力テストの結果
（東京都の平均を50としたときの偏差値）

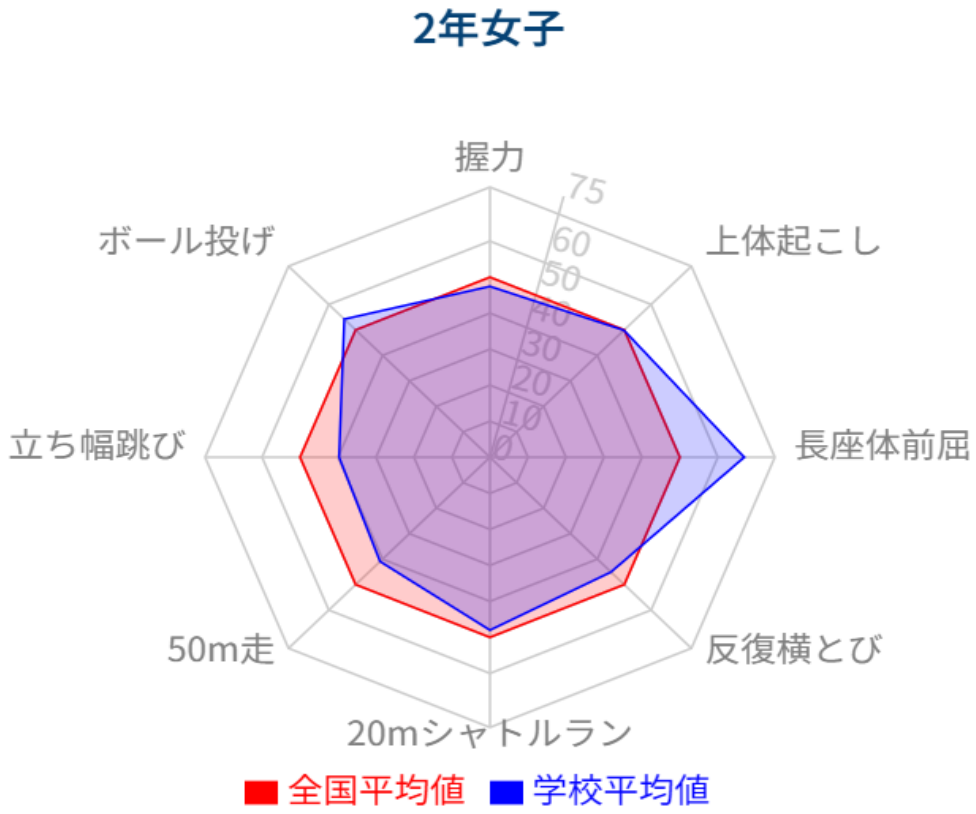




男子は都平均と同等。女子は都平均よりやや低い。

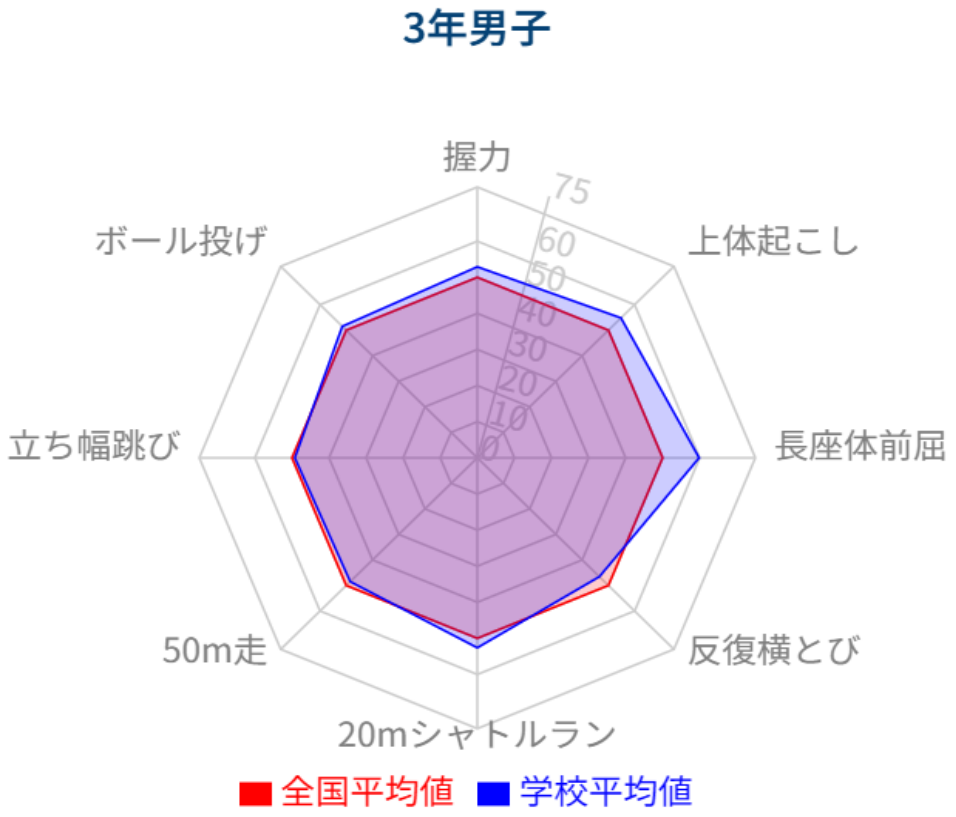
新体力テストの結果
（東京都の平均を50としたときの偏差値）

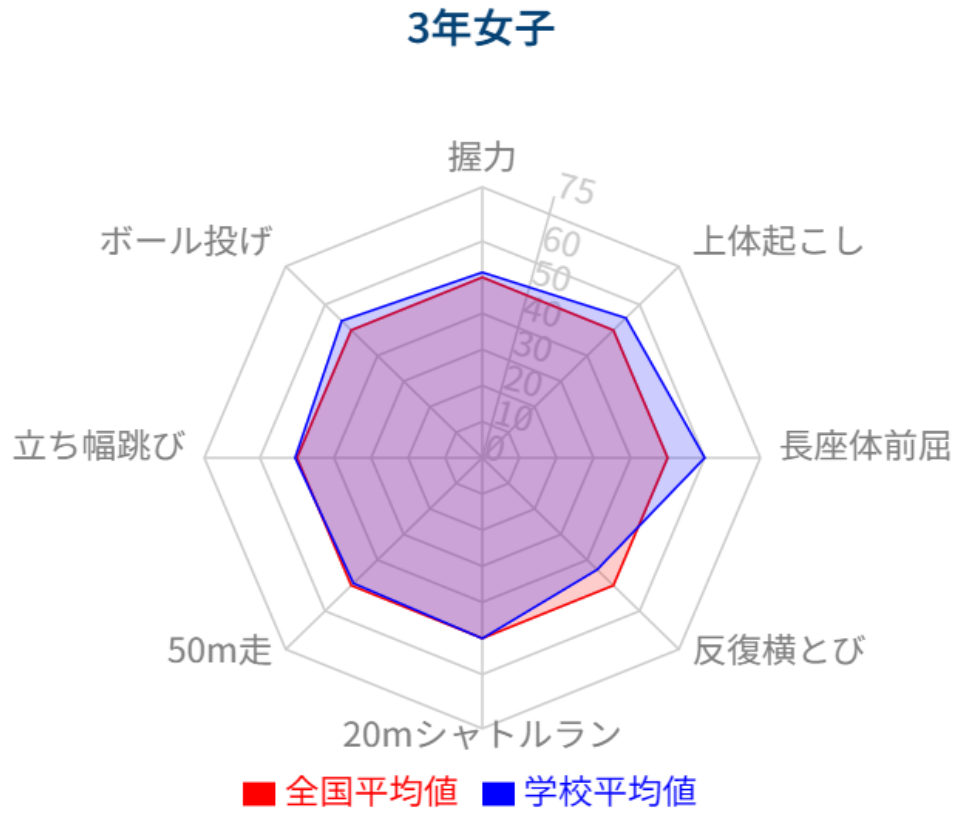




男子は都平均より**やや高い**。女子は都平均より**低い**。

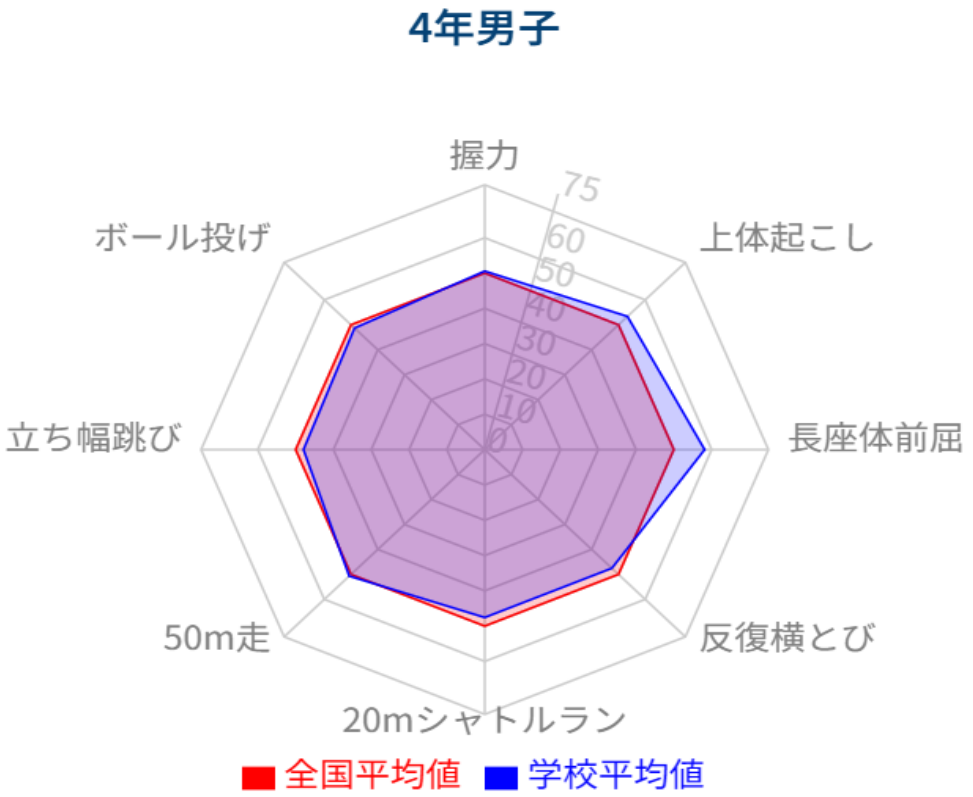
新体力テストの結果
（東京都の平均を50としたときの偏差値）

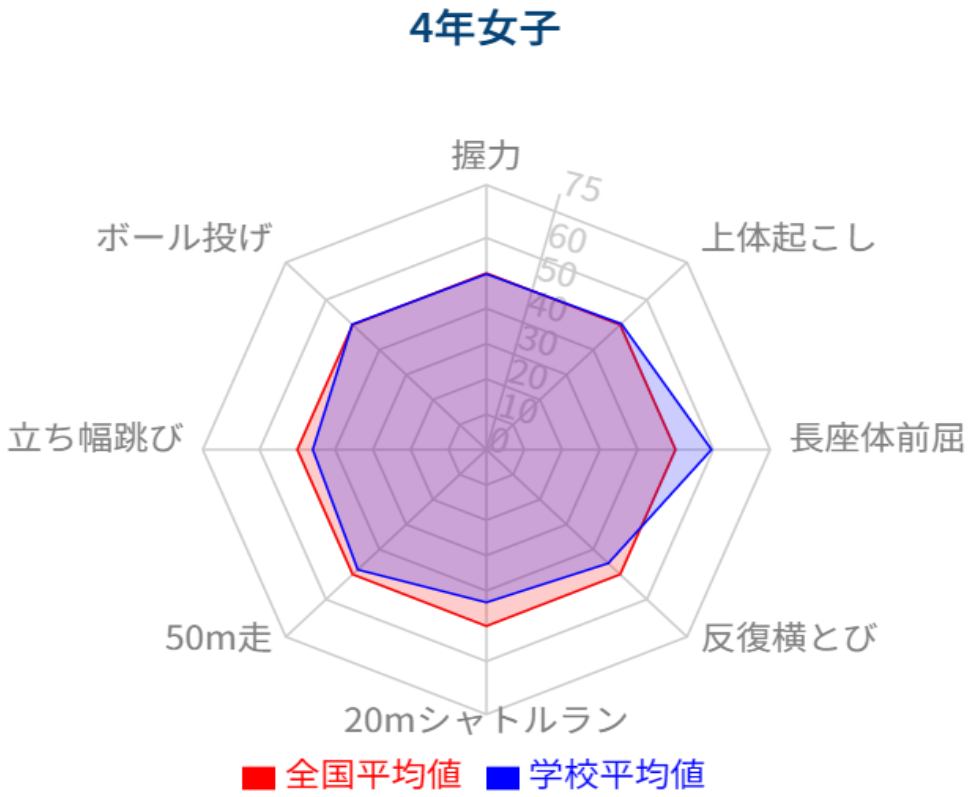




男女ともに都平均同等。

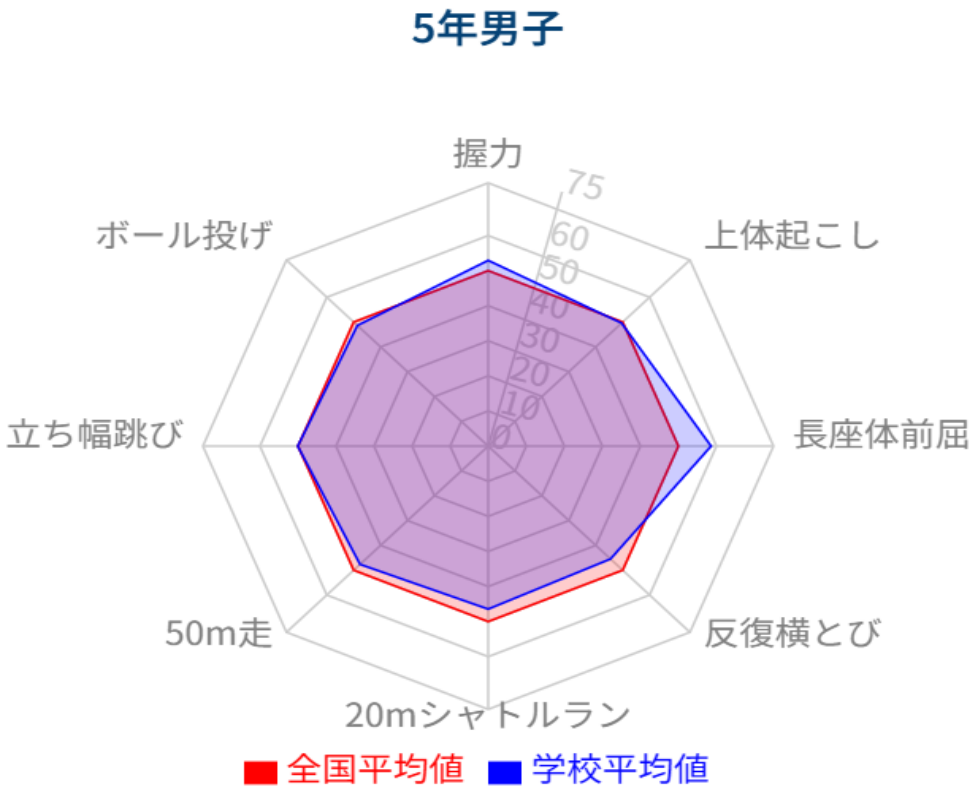
新体力テストの結果
（東京都の平均を50としたときの偏差値）

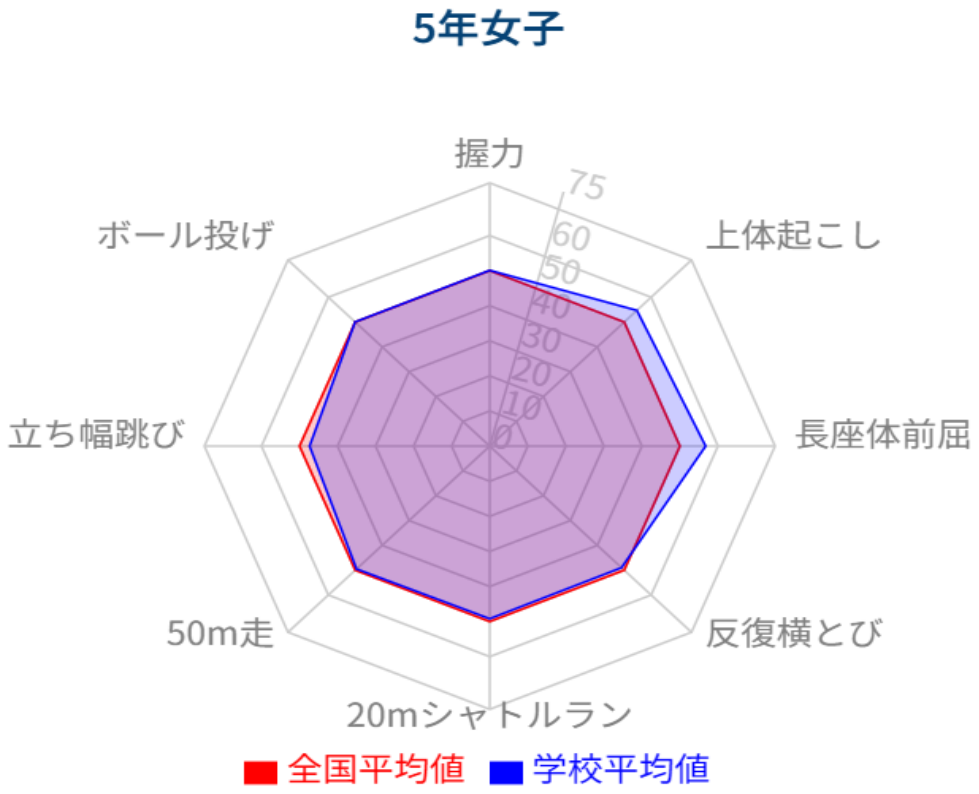




男女ともに都平均同等。

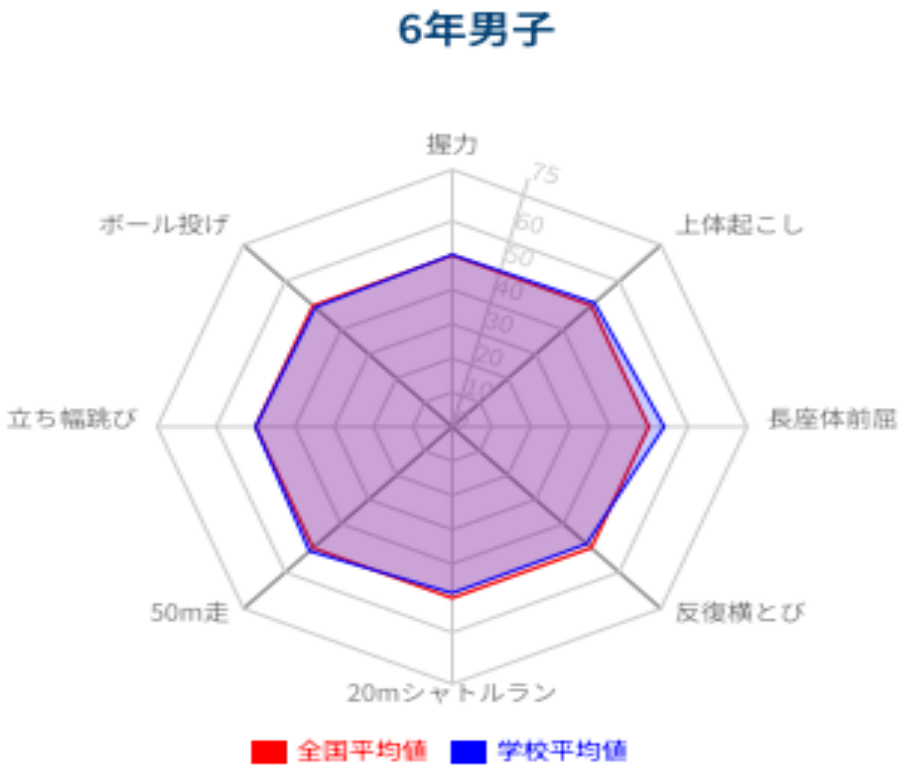
新体力テストの結果
（東京都の平均を50としたときの偏差値）

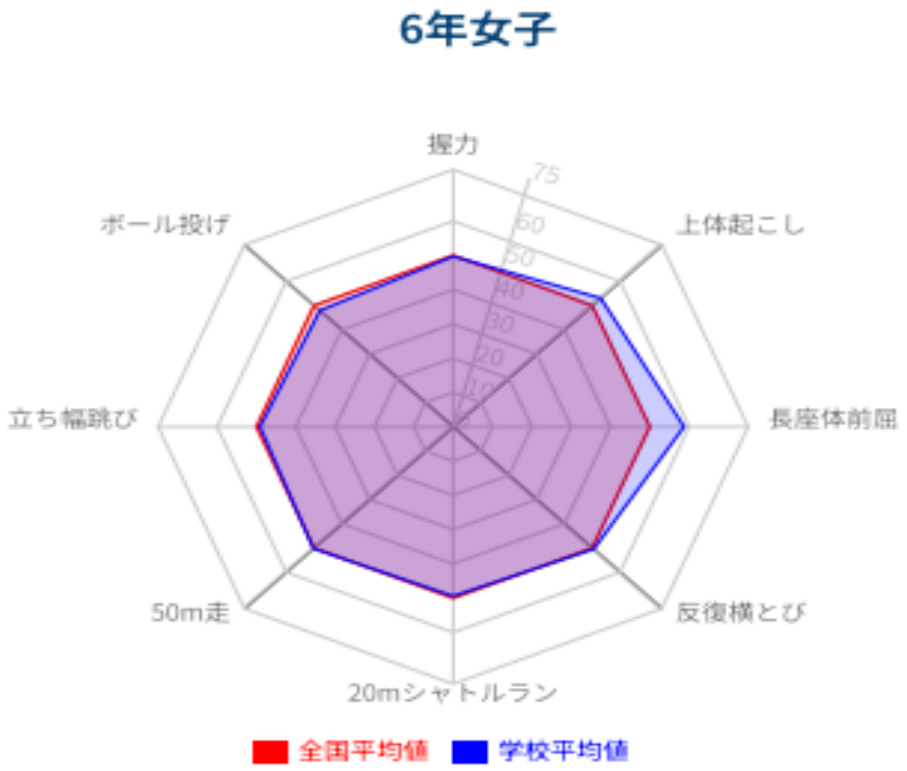




男女ともに都平均同等。

新体力テストの結果
（東京都の平均を50としたときの偏差値）





男女ともに都平均同等。

嶺町小学校児童の体力の現状

【昨年度との比較】

・全体的に昨年度との変化はない。

・昨年度、特に低かった「20mシャトルラン（持久力）」が少し改善。

➡体力向上の取組や家庭での取組／目標をもたせたことが要因

【種目別に見ると】

○「長座体前屈」（＝柔軟性）は都平均よりも高い。

⇒身体が柔らかい児童が多い

●「ソフトボール投げ」は都平均を下回る。

➡ボールを投げる機会が少ない、環境が整っていない。

３　なぜ体力が大切なのか

体力・体格と学力の関係

中学1年生300名ほどの体力と学力（保健体育を除く8教科の評定）のデータを収集

《結果》

○高体力の生徒 ➡ 良好な評定値

○体格の平均付近の生徒 ➡ 良好な評定値

●痩せ傾向・肥満傾向 ➡ 評定値が低下傾向

●低体力の生徒 ➡ BMI（肥満度が高い）／高い評定値を取る生徒が少ない

普段から運動習慣あり＝高体力の傾向

生活習慣と体格＝深い関係

普段から運動に取り組み、高体力

適切な生活習慣が身に付いている

高い評定を得る生徒が多い

森田憲輝（2020）〈体力と学力の興味深い関係〉体力向上が苦手科目の成績向上につながる？『体育科教育　2022年1月号』p30-33より

体力の変化と学力の変化

先ほどの生徒を中学3年生時まで追跡調査。体力と学力の変化を考察。

《結果》

○中学1年時～中学3年時にかけてのスポーツ活動

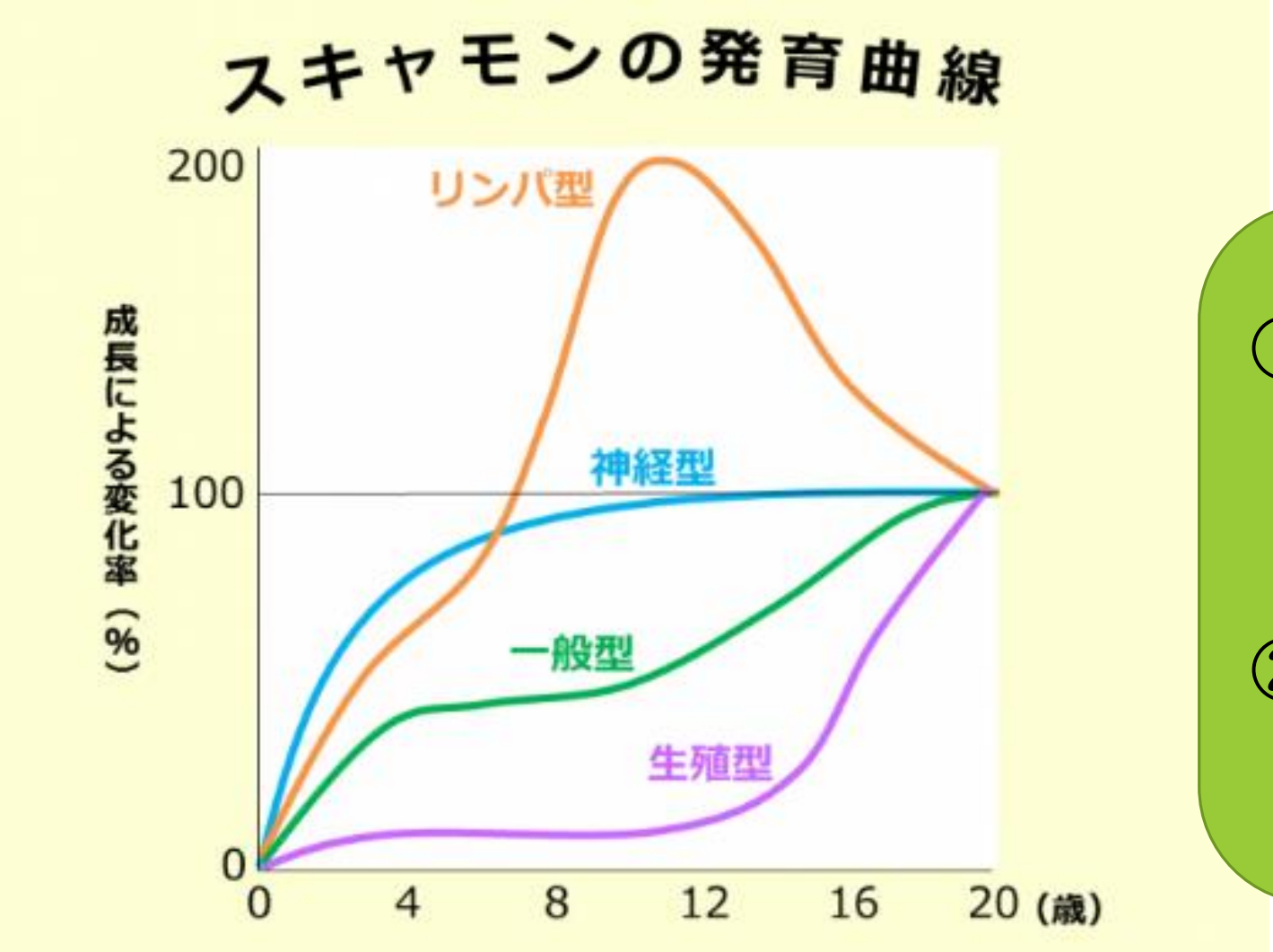
　　➡中学3年時の体力向上に寄与

○中学3年時の体力　➡　中学3年時の評定と関係している。

●中途退部　➡　体力低下　➡　学力低下

スポーツ活動による体力向上が
中学3年生時の学力変化にポジティブに関係している。

森田憲輝（2020）〈体力と学力の興味深い関係〉体力向上が苦手科目の成績向上につながる？『体育科教育　2022年1月号』p30-33より



①幼少期から
　多様な動きを経験すると、
　運動能力が高まる。

②小学校在籍中が、
　最も運動能力が伸びる。

幼児期に身に付けたい36の動き

・人間の基本的な動き＝36種類

・幼児期に多様な動きを経験させることが、それ以降の運動能力にかかわる。

・「危ないから経験させない❌」
➡「大人が安全確保、見守る」

山梨大学 『中村和彦氏が提唱する子どもが伸びる36の基本動作』

学校で気を付けなければいけないこと

学校での調査に、こんなデータがあります・・・

「運動指導を積極的に実施している学校」と「運動指導をしていない学校」の子供の運動能力を比較

➡「運動指導をしていない学校」の方が幼児の運動能力が高い。

《原因》

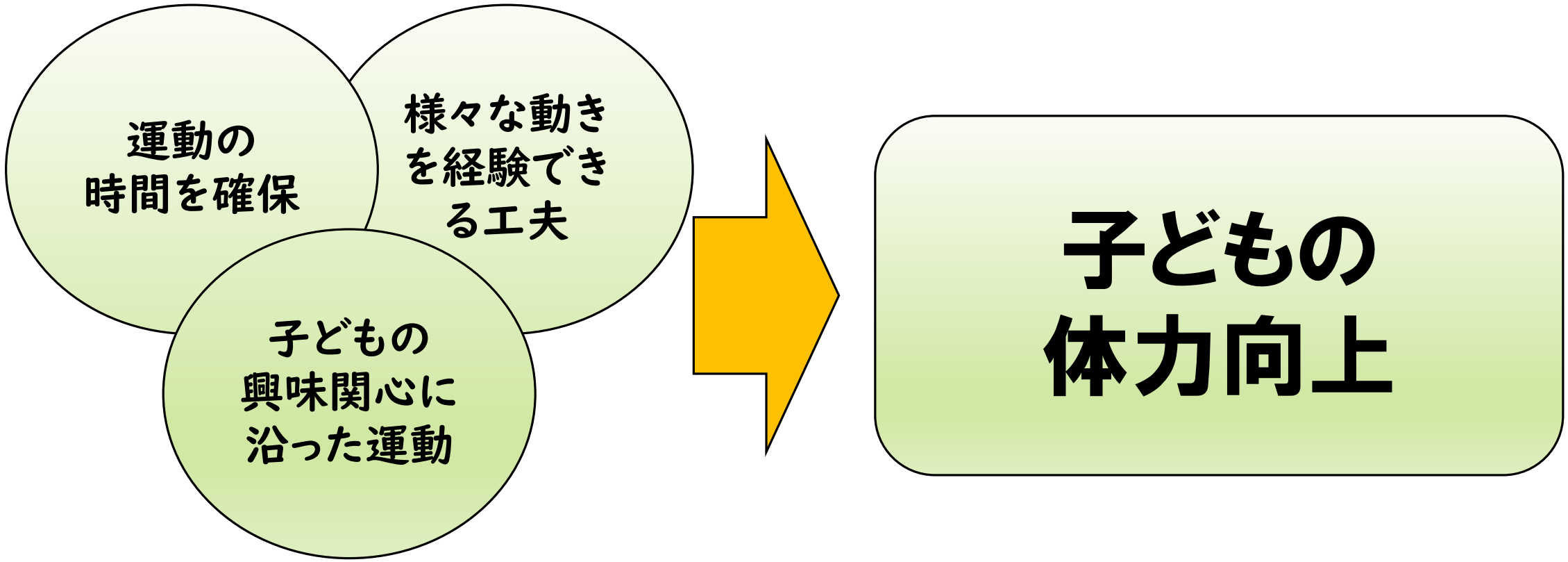
①一斉指導のため、**説明を聞く時間が長く**、体を動かす時間が短い。

②**同じような運動の繰り返し**が中心で、多様な動きの経験ができない。

③**「やりたくない運動」をやらされる**ことが多いため、運動に対する意欲が育たない。

長野康平（2020）コロナ禍の子どもの体力低下にどう向き合うか『体育科教育 2022年1月号』p26-29より

学校で気を付けなければいけないこと



長野康平（2020）コロナ禍の子どもの体力低下にどう向き合うか『体育科教育 2022年1月号』p26-29より

学校での取組み

①授業体育の充実

➡「運動する楽しさ」を一人一人に保証
そのための授業改善

②休み時間等に行う体力向上の取り組み

➡マラソンタイム　短縄週間　運動委員会の企画など

生涯にわたって運動にかかわる素地を育てる

体育授業における4つの関わり方

「する」「見る」「支える」「知る」

多様な関わり方があること

日常生活の中の何気ない行動でもスポーツへの大切な関わりのひとつであるということに気付かせたい！

生涯にわたってスポーツに親しむ方法を見付けるきっかけに！

各家庭でできること

親の「運動嗜好」が子供の体力に関係！？

〇両親が「運動好き」　➡　子どもへの運動支援がされている

※運動支援＝運動をするきっかけを与えている　など

●両親とも「運動が嫌い」➡　子どもの体力が低い

☆家の人と一緒にスポーツを「する」だけではなく、

「（テレビ等を含め）スポーツを観る」「スポーツについて話す」

と答えた児童は、運動時間が長く、体力得点も高い！！

長野真弓（2020）子どもの体力低下・二極化問題への新たな視角　親の運動嗜好が子どもの体力に与える影響『体育科教育　2022年1月号』p38-41より

まとめ

小学校での「体育の授業は楽しい」は、「中学校でも運動やスポーツをする時間をもちたい」につながります。

児童は、体育が楽しくなるためには「自分のペースで行うこと」「友達と学ぶこと」を挙げています。楽しい体育の授業の中には、健康の保持増進や仲間づくりなど、将来役に立つ事柄が詰まっていることに児童が気付き、学習していくことが、主体的に運動やスポーツに取り組む姿勢を育むことにつながると考えられます。

学校と家庭で協力し、「運動嫌いにさせない」ことが何よりも大切です。

今の子ども達が親世代になったとき、「運動好きの再生産」が起こるよう、今のうちから取り組みましょう！